様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成　25　年　6　月　19　日現在

機関番号：36301
研究種目：研究活動スタート支援
研究期間：2011～　2012
課題番号：23820078
研究課題名（和文）　韓国語諸方言のアクセント研究

研究課題名（英文）　Accent of Korean Dialects

研究代表者　姜　英淑（ＫＡＮＧ　ＹＯＵＮＧＳＵＫ）
松山大学・人文学部・講師

研究者番号：80610162

研究成果の概要（和文）：本研究では，韓国語の全羅南道（ちょるらなむど）の麗水（よす）地域のアクセント体系の記述及び地域差を中心に実地調査を行った。主に，突山島（どるさんど）方言のアクセント記述を行い，複合名詞のアクセント規則，用言のアクセントとの特徴を解明することができた。また，アクセント現象は，慶尚道諸方言における現象と非常に緊密な関係にあることを明らかにした。慶尚北道（きょんさんぷくど）の奉化方言のアクセント規則及び用言のアクセント特徴を明らかにすることができた。

研究成果の概要（英文）：In this study, I clarified the accent systems of the Yeosu dialects of Jeollanam-do of Korean and conducted field research focusing on regional differences. This study revealed that the accent rule of compound nouns and the accents of verbs and adjectives in the Yeosu-Dolsan dialect. In addition, it is found that the accent phenomenon is very close with Gyeongsang dialects. Also, The accent rule of compound nouns and the accents of verbs and adjectives in Bonghwa dialect of North Gyeongsang Province have been clarified.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2011 年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2012 年度	1,100,000	330,000	1,430,000
年度			
年度			
年度			
総　計	2,300,000	690,000	2,990,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：言語学・言語学
キーワード：韓国語諸方言のアクセント，全羅南道諸方言，麗水方言，アクセント規則

１．研究開始当初の背景

韓国語の諸方言は，日本語のような高さアクセントであり，アクセント（核）若しくは語声調が有意味であると解釈されてきた。姜英淑（2008）は，韓国語の有アクセント方言のうち，慶尚南道（きょんさんなむど）の 11 の方言を実地調査し，その体系を解明した。複合名詞のアクセント規則及び用言の活用形のアクセントの特徴を根拠に，従来の研究とは異なり，アクセント核と語声調は（狭義のアクセントと声調），一つの体系の中に共存しうるものであると新たに主張した。従来の研究は，韓国語の慶尚南道諸方言のみに限ったものだったが，これは慶尚南道諸方言のみならず，韓国語諸方言の中に実例が沢山あると考えられる。そのため，実地調査による韓国語諸方言のアクセントの記述研究及びその体系の解明が必要になった。

２．研究の目的

本研究は，韓国語の有アクセント方言（主に，慶尚北道及び全羅南道諸方言）のアクセント体系を明らかにしつつ，相容れないとされてきた「アクセント核と語声調が一つの体系内に共に存在しうる」という理論の一般化を図るための記述研究である。

３．研究の方法

本研究は，数回に渡るフィールドワークを行い，インタビュー調査で得られた資料に基づく記述研究により達成できる。インフォーマントをさがし（60 代以上），基本的には 1 対１の調査を行うが，複数の人数の調査が必要な時もある。語彙全般に渡る調査のため，数日程度の滞在が必要である。

調査資料は調査地に行く前に準備するが，方言形などは現地で追加する時もある。具体的には，名詞項目・複合名詞項目・用言などの語彙リストを作成する。そのリストに基づき単独の形・助詞付きの形・短文を発音してもらい，録音を行う。その録音資料を聞き直し，アクセントの特徴や体系の解明を行う。

４．研究成果

本研究は主に，全羅南道地域および慶尚北道の奉化（ぼんふぁ）方言のアクセント記述及びその体系の解明を中心とした。

＜図１　全羅南道地域＞

（１）麗水地域は，多くの島があるため地域によってアクセント特徴や体系に違いがあると予想される。

本研究では，突山島，麗水市内，蓋島（げど）のアクセント記述を行い，これらの地域にアクセントの差があることが分かった。

突山島方言は，郡内里（ぐんねり）・昇月里（すんふぉるり）の 2 地点を調査し，両地域におけるアクセント差はないことが分かった。アクセント特徴については，詳しい調査により，名詞および用言共に２つの型が区別される体系であることが明らかになった。

＜表１　名詞のアクセント体系＞

	１音節	２音節	３音節
α	［○］◎	［○○］◎	［○○］○◎
β	［○］◎	○［○］◎	○○［○］◎

○→任意の音節，◎→助詞のアクセント，音調の上昇・下降→［・］

α：文節の最初の 2 音節が高く，その後は低く発音されるもの

β：文節の次末音節のみが高く発音されるもの

（「1 音節名詞＋助詞付き」は，文節末のＨを避けるため，［○◎］→［○］◎のように現れている）

複合名詞を含む名詞約 3000 語に，語尾，1）-i/-ka（～が），２）-to（～も），３）-e（～に），４）-eto（～にも），５）-ita/ta（～だ），６）-k’aci（～まで），７）-pota（～より）がついた時の音調型を調べた。語尾は，名詞のアクセントに順接もの「１）～５」」，語尾自らのアクセントを持っているもの「６」～７）」があり，これらの助詞が名詞に付いた時は音調型の現れ方が異なる。

複合名詞のアクセント規則は，「Ｘ＋Ｙ＝Ｚ」の規則が働いており，「1 音節β＋1 音節α」の組み合わせは「Ｘ＋Ｙ＝Ｙ」の結果になるが，これはアクセント合流による結果であると解釈できる。

用言の活用形のアクセントも名詞と同様に２つの型が弁別される体系である。語尾は，助詞と同様に，語幹アクセントに順接するもの（ⓐ～ⓔ）と語尾自らのアクセントを持っているもの（ⓕ，ⓖ）があり，語幹に付いた時の音調型が異なる。

ⓐ-ta（基本形），ⓑ-ko：～て（並列の接続形），ⓒ-(ɨ)mjən：～ば（条件形）ⓓ-a/əsə：～て（理由の接続形）　ⓔ-at/ətt’a：～た（過去形）

ⓕ-(sɨ)mnita：～ます（尊敬形）

ⓖ-(nɨ)nta：～ている（現在形）

これらの語尾が付いた時は，名詞には見られない音調交代が現れる。このような，用言の活用時のアクセント特徴は，慶尚道諸方言と非常に緊密な関係にあることが分かった。3 つの型の区別がある慶尚南道山清（さんちょん）方言と所属語彙を対照することにより，山清方言の第１音節が高い音調型（①型）が

突山方言では表１のαに合流していると捉えられるが，用言の１音節語幹においては音節構造によって合流の方向が異なるものがある。この点は，名詞には見受けられない現象で，名詞と用言との違いが見られる。

その他の突山島方言におけるアクセント合流は，アクセント性質（語声調・アクセント核）が反映されていると解釈した。慶尚道方言以外にも「一つの体系内に語声調とアクセント核が共に存在している」方言があり，「アクセント核と語声調が一つの体系内に共に存在しうる」という理論の一般化ができると考えられ，アクセント理論にも大きく貢献できるものと評価できる。

（２）麗水の別の地域の蓋島（げど）における名詞のアクセント調査を行ったが，まだ体系を解明できるほどのデータが集まらず，アクセント特徴を記述しきれない。しかし，突山方言とは所属語彙および音調型に差が見られ，地域差があることは確認できた。麗水市内のアクセントに関する先行研究の田村宏（1985）に提示されている語彙分類に類似しており，その実態を明らかにすることできると考える。引き続きの調査研究が必要な方言として今後の課題となる。

（３）全羅南道の求礼（くれ）地域の名詞のアクセント実施調査を行った。この方言は，慶尚道と隣接しており，アクセント特徴における類似点があると予想できる。先行研究の福井玲（1998）の調査地を追跡調査し，さらに地理的に麗水地域に隣接している地点を調査し，両地域の所属語彙の違いが確認できた。この点地域差が現れていると考えられる。引き続き，複合名詞のアクセント規則，用言のアクセント特徴の記述が課題となる。

（４）慶尚北道に位置する奉化（ぼんふぁ）方言の複合名詞のアクセント規則および用言のアクセント特徴の記述ができた。

＜図２　慶尚北道地域＞

名詞の体系は，n＋１の型の区別があり，アクセント核の位置の対立によるもの（①～③）と文節単位に最初の２音節が高く，その後は低くなるもの（＝）があり，性質の異なる２種類のアクセント共に存在している体系である。

①型～③型までは，アクセント核のある音節のみが高く発音される。語末に核がある音節に

特殊語尾が付くと語尾のアクセント位置が活きる特徴がある。これは「語末核規則」といい，慶尚道方言に広く見受けられる現象である。

＜表２　名詞のアクセント特徴＞

	１音節	２音節	３音節
①	［○］◎	［○］○	［○］○○
②		○［○］	○［○］○
③			○○［○］
④			
＝	［○◎］	［○○］	［○○］○

○→任意の音節，◎→助詞のアクセント，音調の上昇・下降→［・］

これに対して，＝型は語末が高い名詞に特殊助詞がついても，①型～③型で現れる語末核規則による現象は見られない。助詞が付くと常に文節単位で「最初の２音節が高く，その後は低く現れる」特徴を保持している。
よって，この違いはアクセントの性質の違い異に起因するものと結論づけ，①型～③型まではアクセント核型，＝型は文節単位に決まったパタンが被さっている語声調と解釈する。

複合名詞のアクセント規則は，「Ｘ＋Ｙ」の組み合わせで，Ｘがアクセント核型なのか語声調なのかで大きく分かれる。Ｘがアクセント核型の場合は，語末核型なのか否かでさらに別れる。Ｘが語末核型であれば，語末核型規則により，Ｙのアクセント位置が活きる。Ｘが語末核以外の核型は，Ｘの核の位置が活きる。これに対して，Ｘが語声調の場合は，Ｙのアクセントに関係なく，Ｘの語声調の音調パタンが文節全体に被さる。よって，アクセント規則にもアクセント性質の違いが反映されている。

用言のアクセント体系も，表２の名詞のアクセント体系のように２種類のアクセントが共に存在し，全体は n＋１の対立数を持っている。

語尾の種類は，自らのアクセントを持っているものや語幹アクセントに順接するものに分けられ，語幹に語尾が付く際は，複合名詞のアクセント規則が働いていることが明らかになった。

アクセント規則及び用言の活用にもアクセントの違いが反映されていることが明らかになり，「アクセント核と語声調が一つ

の体系内に共に存在しうる」という理論の一般化ができる実例となる。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計２件）
①姜英淑「韓国語の麗水突山方言の用言のアクセント資料」,『言語文化研究』, 査読無, 33 巻, 第 1 号, 2013（近刊）
②姜英淑「韓国慶尚南道の泗川方言及び山清方言のアクセント」『音声研究』, 査読有, 16 巻　第 1 号, 2012, 149-161

〔学会発表〕（計 3 件）
①姜英淑「韓国麗水市突山邑方言のアクセント」日本言語学会　第 146 回全国大会, 茨木大学, 2013,6.15
②姜英淑「韓国語の麗水方言におけるアクセント中和」国立国語研究所共同研究プロジェクト「日本語レキシコンの音韻特性」第 3 回発表会, 九州大学, 2012,11.23
③姜英淑「韓国語の麗水突山方言の用言アクセント」日本言語学会　第 144 回全国大会, 東京外国語大学, 2012, 6.16

６．研究組織
(1)研究代表者
姜英淑
（ＫＡＮＧ　ＹＯＵＮＧＳＵＫ）
松山大学・人文学部・講師
研究者番号：80610162